



●大豆トラスト  
岩見市砂浜地区で大豆畑の見学・交流会にて。  
(8月29日(土))



●まるごと学ぼう！食育講座2009  
由仁町「みたむら農園」での現地学習  
より。(8月22日(土))



発行 ●小麦トラスト 江別市で行われた産地見学交流ツアー。(7月18日(土))

NPO 法人 北海道食の自給ネットワーク  
札幌市東区北15条東18丁目2-17 (有)ワードエム内  
TEL (090) 2818-5502 FAX (011) 789-8890

ホームページアドレス  
<http://jikyuu.net>  
E-mail: [info@jikyuu.net](mailto:info@jikyuu.net)

## 今月の話題

### EPA・FTAとは何か？

それは“農業・食料の犠牲の上に  
世界に羽ばたく日本の象徴”

北海道大学大学院農学研究院教授 飯澤 理一郎

つい2、3年程前まで、WTOドーハラウンド交渉の成り行きが大いに問題とされ、関税が大幅に引き下げられることにでもなれば北海道農業は大きなダメージを受けると巷では騒がれていた。しかし、日豪のEPA・FTA交渉が開始された2007年あたりから、世間の耳目はWTOからEPA・FTAに集まるようになってきた。

### ■EPA・FTA とは一体何か？

EPA・FTAとは一体何か。WTOはこの世に登場してから10数年も経ったから、概ね解る。しかし、EPA・FTAと問われるとにわかには心許なくなる。そんな経験をお持ちの方もいらっしゃるのではないだろうか。

近年、ある事柄や組織・機関の英語の頭文字だけを取って、それらの略称にするというやり方がわが「日本」でも一般的になってきた。嘆かわしく、空しい気もするが、流行だからとあきらめるしかないのだろうか。

さて、EPA・FTAもその例にもれない。EPAとは「Economic Partnership Agreement」のEとPとAとを取ったもので、日本語では「経済連携協定」と訳す。また、FTAは「Free Trade Agreement」のFとTとAとを取ったもので「自由貿易協定」と訳す。日本語の語感から察しがつくように、両者とも協定の締結国間で様々な面での「自由化」「関税撤廃」を推し進めようとするものであり、通例2ヶ国や数ヶ国間で締結する。両者のうちFTAは「物」や「サービス」の貿易を主たる対象としているのに対して、EPAの自由化等の範囲は更に広く「投資」「人的交流」、そして様々な「協力の促進」にまで及ぶ。FTAは「経済的国境措置」の撤廃、EPAは少々オーバーな表現を使えば「国境措置」そのものの撤廃と言っても良いかも知れない。EPAの代表例はNAFTA(北米自由貿易協定)に、EPAのそれはEU(欧州共同体)に求められよう。

## ■何故、今、EPA・FTAか？

「自由化」の推進と言えば、世界的な機関としてWTOがあるのに「それとは一線を画すEPA・FTAに何故、世界各国は、あるいは日本は走るのか」と言う疑問が当然にも生じてこよう。その答えは、この間のWTO加盟国の拡大と交渉の行き詰まりの中に隠されているように、われわれには思えるのである。

承知のように当初、77ヶ国・地域で出発したWTOは今や153加盟国・地域を数えるまでになり、加盟申請中及びオブザーバーを加えると優に200を超え、国連加盟国192ヶ国を上回るに至っている。これ程までに広がりを見せてくると、「1国・地域1票」制をとる閣僚会議での合意形成は至って困難になり、また各種交渉も紆余曲折を繰り返すようになってくる。2001年に始まり優に8年を経過したにも拘わらず、一向に出口の見えないドーハ・ラウンドの顛末がそのことを雄弁に物語っている。

何時まで経っても一向にラチのあかない交渉に各国、特に先進各国が嫌気をもよおしたとしても何ら不思議ではない。思えば、EPA・FTAを熱心に進めているのはアメリカやEU諸国、カナダ、オーストラリア、日本などの先進諸国が中心である。それらの国々の中に“WTOで面倒な交渉を重ねるよりは、自国にとってメリットの多い国々と個別に協定を結んだ方が得策”とする思惑が強烈に働いているような気がしてならないのである。事実、FTAの締結件数はWTO発足後、特にシアトル交渉の決裂以降、大きく増大しており(2000～04年56件、05～07年25件)、今や148件にも達しているのである。WTO交渉の混乱を尻目に、今や、それに代わり、主要国間のEPA・FTA網が世界を覆いつつあると言って良いのかも知れない。

## ■農業を犠牲にEPA・FTAに走る日本

さて、わが国は2002年11月のシンガポールを皮切りに、05年4月にはメキシコ、06年7月にはマレーシア、07年9月にはチリ、11月にはタイ、08年7月にはインドネシア・ブルネイ、12月にはASEAN全体・フィリピンの都合9つのEPA・FTAを締結・発効させてきた。また、ベトナム・スイスとは署名を済ませ、韓

国・GCC(バーレーン・クウェート・オマーン・カタール・サウジアラビア・アラブ首長国連邦の湾岸理事会加盟国)・インド・オーストラリア・ペルーの5ヶ国・地域とは今、交渉中である。政府の「2010年に向けたEPA工程表」(2008年6月)によれば、締結数は2009年初めまでに12以上、貿易額シェアは25%以上とされていたから、若干それを下回るものの、急速にEPA・FTA網を張り巡らせてきたとすることができる。

ところで、EPA・FTAを締結する際に何時も問題となるのは食料・農産物の取扱いである。EPA・FTAは「関税撤廃」を原則とし、締結国間の総貿易額の概ね90%以上が関税撤廃品によって占められていることを原則とするからである。食料・農産物輸出割合の高い国とEPA・FTAを締結しようとする場合、どうしても「食料・農産物」の取扱いが問題とならざるを得ないのである。メキシコの場合は鶏肉・牛肉・オレンジ生果、タイは鶏肉、フィリピンは粗糖・鶏肉の取扱いなどが、特に大きな問題になったことは記憶に新しいところであろう。しかし、問題になったとは言え、関税軽減が回避されたり、輸入割当数量が据え置かれたりしたケースは皆無に近い。良くて関税軽減や割当数量増加のテンポが若干緩やかにされた程度でしかない。

国民食料と日本農業を犠牲に、各国とのEPA・FTAは結ばれてきたと言うしかない。何故、EPA・FTAに走るのか。多くを語る必要はあるまい。世界大に拡大した日本企業の「自由貿易エリア」確保と「原油・石炭・鉄鉱石などの諸資源獲得」こそがEPA・FTA締結の何よりも目的なのである。それは“農業・食料の犠牲の上に世界に羽ばたく日本”の象徴とでも言えようか。それでは、昨年、政府が高々と掲げた「食料自給率50%」の看板が泣こうというものである。

札幌市 ■飯澤理一郎氏プロフィール

1948年 山形県生まれ。

北海道大学理学部卒業後、北海道大学大学院農学研究科農業経済学専攻博士課程修了。農学博士。名寄女子短期大学講師、専修大学北海道短期大学助教授・教授を経て、北海道大学助教授。改組により、現職。



食の思い出 季節の話題

# 食のつれづれ日記



「嫌われ虫の小さな世界」 札幌市 自然案内人 吉田 玲子

藻岩山の麓に暮らして早6年。家の横にある百坪ほどの畑に植えられているのは、トマト、きゅうり、なすび、とうきび、大根、人参、菜っ葉類などなど。夏から秋にかけての我が家の食料自給率をぐーんと押し上げてくれています。自分たちで食べる野菜ですから、形がいびつだろうが虫食いだろうが一向に構いません。なので農薬も使いません。畑の周りは草ぼうぼう。ついでに畑の中も草ぼうぼう。いえ、本当は綺麗にしたいと思っているんですけどね。そんな状況なので、我が家の畑にはたくさんの虫たちが住んでいます。自然情報の執筆、自然体験会の企画運営、野生生物の調査などを生業にしている身としては、この野性味溢れる畑はネタの宝庫なのであります。愛用のカメラを持って、野菜の間に佇んでいる私を、近所の人是一体どう思っているのかいささか気になるころではありますが、そんなことはまあどうでも良いことなので横によけておくことにして…いくつか虫の話を紹介したいと思います。

まずはこの方、アブラムシ。彼女らは増える。とにかく増える。「あ、アブラムシがついたな」と思ったら数日のうちにびっしりとはびこる。なぜなのか。それは、彼女らは“処女生殖”といって、雄がいなくても自分自身のクローンを生み出すことができるからなのです。産むのは卵ではなく、親と同じ形をしたクローン。そして、たった今産み落とされた子のお腹の中には、なんとすでに孫が入っているという。これじゃあ増えるわけだ。なので、アブラムシの生態を観察してやろうという人以外は、一匹でも見つけたら素早く駆除しなければ後で泣きを見るということになります。

最後にもうひとつ、サシガメ。カメムシの仲間で、ストローのような口を獲物に刺して体液を吸うから「刺しガメ」。よく葉の上で、しなしなに干からびたイモムシを口にぶら下げている姿を見かけるのですが、虫好きでも思わず引いてしまうその風貌に、益虫なのに害虫扱いされて悲しい運命をたどっているであろうことは容易に想像がつくわけで。駆除する前に是非とも虫たちの働きっぷりを見て欲しい、と自然案内人は切に思うのであります。

## 新鮮な野菜が並ぶ のつぼろ野菜直売所

江別市 平野 睦美

最近、私が野菜を購入する直売所。今回は、江別の食材が集まる「のつぼろ野菜直売所」をご紹介します。

江別市には野菜等を中心とした直売所が数多くあります。その中の「のつぼろ野菜直売所」は、昭和の後半に5戸の生産者が無人の直売所を開設したことから始まり1985年にJAが規模を拡大、その後増改築を繰り返して現在に至っています。顧客層は、ここ最近では若い主婦層の来店も増えているのですが、50～60代が多いそうです。

直売所には、毎朝新鮮な野菜が農家さんから届きます。中には小麦トラスト生産者である富永さんが所属する(株)輝楽里の野菜や加工品もあります。スーパーで見かける品物に加え、変わった野菜等も並ぶのも直売所の特長です。特に様々な品種があるため、食べ比べができるというのも魅力ではないでしょうか。生産者が明記されているため親近感が湧いて、私もいつも買いすぎてしまいます。

その土地に住む人が地元の食材を食べられることは本来なら当たり前のことなのでしょうが、今や理想なのかもしれません。そういった意味では直売所は大切な存在だと思います。太陽の恵みを一身に受けた色の濃い野菜、また旬の野菜が持つ香りや味を皆さんも試してみてくださいはいかがでしょうか。

### ■のつぼろ野菜直売所■

江別市西野幌111

営業期間：5月中旬～11月上旬

無休

営業時間：午前8時～午後5時



行ってみよう！





### 『そろそろスローフード』 (2008年)

著●島村奈津+辻 信一著 大月書店 1,260円

『スローフード』その考え方、それを取巻く環境を作者が丁寧に解説しているので、とても読みやすいです。この本を読んで改めて食育やスローフードや環境について考えるようになりました。地球の裏側で行われていること、ファーストフードの多様化、日本の食文化の変化、食卓に並んでいる物が簡単で省略されていることなどが色々書かれています。また、スローフードに取り組んでいる自治体や食にこだわるレストランなども紹介されています。

実際に取組むと、とても時間のかかることでもあり、やはり日本人の生活には難しいということも感じました。自分もファーストフードに頼って、矛盾しているところもあります。改めて、自分たちも自然の一部ということを知る一冊です。少しずつでも自分たちを取巻く環境が、変わればと私は強く思います。  
(札幌市 小林 大輔)

### 『野菜博士のおくりもの』 (2008年)

著●宇都宮庸子 中西出版株式会社 1,260円

皆さんは普段、野菜の旬を意識されていますか？栄養的に優れているだけでなく、旬の野菜にはその時期を乗り越えるために体が必要とする力(成分)が含まれています。例えば、春野菜は細胞を目覚めさせ、夏野菜はむくみ防止やしみ・そばかす対策に効果があるといった具合に。

この本は、「北海道の野菜博士」と呼ばれ親しまれていた相馬暁さんの想いを継いでつくられました。「読んで、見て、食べて味わう野菜の本」というキャッチコピーのとおり、ステキな野菜の写真たっぷりの一冊です。25種類の野菜が紹介されていますが、「太陽の缶詰トマト」、「ハウレンソウと亭主は立てなきや」など、野菜ごとにその特徴や魅力を一言で表したキャッチフレーズがつけられています。私が直接講演をお聞きしたのはたった一度ですが、これらの相馬語録が強く印象に残っており、この本を読んでその時の様子(相馬さんの声や顔など)が鮮やかに蘇ってきました。作る人にも食べる人にもやさしいという手軽な料理法も載っていますので、ぜひ一度読んでみてください。

野菜についてもう少し詳しく知りたいという方には、「野菜学入門(相馬暁著 三一書房)」もオススメです。来歴や選び方、効能などがわかりやすくまとめられています。  
(帯広市 谷内 恵利華)



## 大豆プロジェクト活動報告

大豆プロジェクトスタッフ 上野千賀子

### ■おかげさまで10周年！大豆トラストラランチ交流会■

2000年から始まった大豆トラスト運動に、継続して参加されている方々を対象とした「おかげさまで10周年！大豆トラストラランチ交流会」を、6月27日(土)、リサイクル環境雑貨のお店「えこふりい」で行いました。当日は、蜂谷さん、宮武さんとお友達の八代さん3名が出席。スタッフ手作りの大豆づくしランチを食べながら、「トラスト大豆で味噌を作り続けている。」「本州のお友達にお歳暮としてトラスト大豆を送っている。」等、「食べ支え」のお話を直接聞くことができ、とても嬉しく活動の励みとなる交流会となりました。

### ■大豆畑の見学・交流会■

去る8月29日(土)、毎年恒例の「大豆畑の見学・交流会」が行われました。午前10時30分、抜けるような青空のもとトラスト参加者、生産者、スタッフ計19名が、砂浜公民館(岩見沢市)に、にこにこ顔で集合。まず山崎さんの大豆畑へ移動し今年の作柄について伺いました。「今年は長雨で農作業ができず苦労したが大豆にはさほど影響はなかった。」との事。元気に育っている大豆を見て一安心しみんなで記念写真を撮りました。次は恒例となった池田農園での野菜の収穫体験。お昼はもぎたて野菜のサラダ、大豆ごはんのおにぎり、バーベキューを囲み交流会。とにかく美味しく、みなさん大満足！

食後は生産者代表の渡辺さんから「ツルムスメは作りづらく、収量が低いいため作付けが減っており、ほとんどが関西方面に販売されている。大豆に限らず米や小麦も新しい品種ができて、その品種特性や気象に合わせた栽培管理を常に研究し続けている」というお話、初めての参加者から「枝豆と大豆が同じものだと、初めてわかりました。」という感想が語られ、「食べ支え」「作り支え」の相互理解を深める有意義な交流会となりました。





## 小麦プロジェクト活動報告

産地見学交流ツアーin江別

小麦プロジェクトスタッフ 村田 均

7月11日(土)、江別市において産地見学交流ツアーが催されました。参加者は生産者、トラスト会員の消費者、メーカー、JA、市役所など総勢37名。当日朝、消費者会員とスタッフ一行は貸切バスで札幌を出発し、まず、最初の目的地であるJA道央江別支所の小麦集荷・調製施設へ。生産者から運ばれた小麦が水分調整や選別、厳しい品質検査後、製粉工場に納められること知り、皆さん「なるほど～」と興味津々でした。そして同じ場所には生産者の方々が農機具のコンバインやトラクターが、轟音とともに動きだす農機に「おおお～」といったリアクションの参加者。生産者は、農機に乗ると一層逞しく格好良く見えました。

この後は昼食作りのため環境改善センターへ。横田サブリーダーの指導のもと「ナン作り」に挑戦しました。驚いたことに生地を作るのは水ではなく、ヨーグルト。作り方は実にシンプルなので自宅でも気軽にできそうです。作業は慣れるに従いナンの形らしくなり、皆さん満面の笑みでした。ナンは粉の味がしっかりと感じられ、食感はモチモチ。ハルユタカの新しい良さに気付かされました。昼食では手作りナンと蝦夷但馬牛(前会報参照)のカレー、地元の新鮮野菜を使ったサラダ、れもんベーカリーのバターロールが揃い、全て好評でした。



食後の意見交換会では、参加生産者から「今後、価格が上昇したとしても国産小麦を食べてもらえるか？」という発言のもと、流通業者、消費者から現状と意見が述べられました。参加者は「安全安心を考え国産」「食料自給率向上のために国産を買い続ける」という意見が多く、消費者の声に農家の植村さんやJAの飯田課長からは、「皆さんの思いを聞き、嬉しいです。今後も頑張って作っていきます」と力強いコメントがありました。

この後は2つの圃場見学をしました。植村さんの圃場では小麦の手刈りをし、一本の小麦の美しさを改めて感じることができました。次は野幌地区の荻野さんのハルユタカの採種圃場でした。「採種圃場」とは作付け用の種を採るための圃場です。当たり前のことながら、農作物を作るためには「その種も作る必要がある」ということに改めて気づかされました。全体を通して参加者全員が北海道の小麦・農業・食を考え、語り合うことができ、充実したツアーとなりました。



## 食育プロジェクト活動報告

「まるごと学ぼう！食育講座2009」

やってみよう農場体験～大地の恵みに感謝しよう～

食育プロジェクトスタッフ 小学校教諭 渡邊雅子

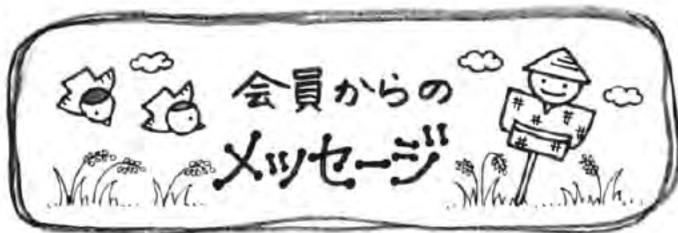
「まるごと学ぼう！食育講座2009～作って食べてたべもの博士」の第3回目は農場での体験学習。参加者一同バスに乗り由仁町に行ってきました。子ども達を笑顔で迎えて下さったのは「ふれあい体験農園みたむら」の三田村雅人さん。三田村さんから一人ひとりに「ミニトマト食べ放題つき」招待状を手渡され、子ども達は大喜びでした。簡単な日程説明や諸注意の後はいよいよ農場での学習です。

まずは野菜の収穫。最初に向かったきゅうりのハウスでは、採ったきゅうりをポキッと折っても染み出た汁がまるで接着剤ような役割を果たし、またくっつくという事実みんな目を丸くしていました。次に向かったミニトマトのハウスでは「自由に食べていいよ」と言われた途端、子どもも大人も夢中でぱくぱく…あまりのおいしさに収穫するのを忘れてしまうほどでした。そしてタマネギ、ブロッコリー、赤ジソ、いんげん、かぼちゃ、ズッキーニと12種類の野菜を次々と収穫。最後はじゃがいも堀りです。はじめは「どこにあるのかな？」となかなか掘り当てられなかった子ども達も「あった！こんなに大きいの見つけたよ」と夢中で拾い集めました。収穫した野菜を運ぶ一輪車の扱いがとても上手で「すごいね」とほめられた子ども達も得意気に頑張っていました。



次はみんなが採った野菜で調理です。今回のメニューは野菜の和風あんかけ丼、サラダ、ジャガイモと大根の味噌汁、そしてゆでたての枝豆とじゃがいも、トウモロコシでした。どれもおいしくて「やっぱり採れたては違うね」「苦手な野菜も食べられたよ」と笑顔が広がりました。

食後は三田村さんから命についてのお話。野菜の収穫前にハウスの前の池に沈めておいたペットボトルにはなんとドジョウがたくさん！「きゃあ！」と叫んで逃げるのかと思いきや「ドジョウの顔ってかわいい」としっかりつかんでいる子ども達の勇敢さに拍手。ドジョウを優しく池に戻した後は、ハウスの横にある雑草一つひとつの名前を確かめ、いろいろな植物がみんな生きていることを一人ひとりが実感しました。「みんな違ってみんないい」という金子みすずさんの詩が聞えてきそうです。刈り取ってあった小麦をつぶして小麦粉にした時、粉をととても大切そうにつまみ上げる子ども達の姿に、食べ物に対する意識が確実に変わったことが伝わりました。



### 「農業とダンス？」

札幌市 井上 淳生

私は現在、札幌市内で社交ダンスのインストラクターをしています。北大大学院では農業経済の勉強をしていました。日本の農業について口角泡を飛ばしながら(ビールの泡?)議論した事を懐しく思い出します。私は、農業とダンスの共作のようなことをしたいと思っています。日々の農作業で使う身体の動きにダンスを援用して作業の負担が軽減できないか。例えば「踊るように作業をする」という発想。レッスンの時、動きや動く上での注意点をダンスだけに閉じ込めなくて、日常の動きの中でも応用できないかと考えるようにしています。

人間の身体というのは不思議なもので、何回も同じ動きをしていると、だんだんと身体に負担のかからない“ラクな”経路を通るようになります。そこで踊るように作業をする。自然を相手にダンスをする。そんな素敵なことが可能なんじゃないかと勝手に考えています。農業とダンス。一見縁遠い世界のようにも思えますが、アイデア次第ではおもしろい動きが生まれてくると思います。そんなことを近くに遠くに思い描きながら、みなさんの輪に入れてもらえればと思っています。

### 「やっぱり心を育てるのは食事から」

札幌市 越後 キミノ

食の自給ネットワークに入会して数年になります。大豆トラスト会員としての大豆料理教室、北村砂浜の大豆畑見学に参加して地場の野菜や焼肉をご馳走になりました。産地交流会の他はあまり参加出来ずに居ります。行事に関ってくださる方々、農業に携わる方々の熱い思いが伝わって参ります。私のそばにも熱い思いで人生をかけておられる方がいます。その方は定年退職後、虚弱体質を改善し、食事が心と体を作ることをご自分の体験に基づき書かれた「心と体にいい話108選」(中西出版1400円)を出版。全国講演をしながら印税を虐待、放棄された子どもたちの施設に寄付するNPO法人を立ち上げました。虐待される子供もする親も不幸なことです。何処かで食い止めなければならないと思います。親自身が食事を大切に思わない結果なのではないでしょうか。元気でなければ仕事も上手くいきません。美味しいからと好きなものばかり食わず、体に良い安全な食事にするように心がけていかなければと思います。身近で地産の野菜、小麦、大豆が手に入ることは、とても幸せなことです。

## ☆自給ネットの会員さん対象「食と農の学習会」のお知らせ☆

会員さんの、会員さんによる、会員さんのための学習会です。第1回のテーマは「FTAとEPAを考えよう！」です。民主党のマニフェストにも載って話題になりましたが、FTAとEPAのメリットとデメリットをきちんと検証し、食と農の観点からどうしたらよいのかを考えます。

■日時: 2009年10月31日(土)13:30~15:45

■会場: かでる2・7 「550会議室」 札幌市中央区北2西7(植物園東側)

※詳細は10月にお手紙でお知らせします。

## ☆「藤崎農園でジャム作り」のお誘い☆

さくらんぼのお花見会員交流会から4ヶ月が過ぎました。藤崎農園のイングリッシュガーデンは秋色の可憐な花を咲いています。ぶどうの季節も一段落した頃にと、藤崎代表から「黒ぶどうジャム作り」のお誘いがありました。

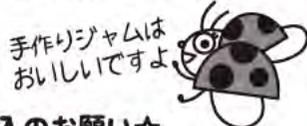
■参加方法: 自由参加 現地集合・解散

■時期: 10月20日~30日(参加者要相談) 所要時間: 13:00~16:00

■参加費: 500円程度(作ったジャムは持ち帰ります)

希望者は直接藤崎代表宅へFAX(0135-32-2765)にてお申込み下さい。  
(極力FAXをお願いします)

■詳細問合せ先: 090-6266-4324 事務局(葦島)



## ☆2009年度及び2008年度会費納入のお願い☆

未納の方には振込み書を同封しました。10月9日(金)までをお願いします。

問合せ先: 090-6266-4324 事務局(葦島)までご連絡下さい。



8月22日土曜日、由仁町の「ふれあい体験農園みたむら」で食育講座の現地学習がありました。目を輝かせながら三田村さんの話を聞き体験学習をする子どもたちの傍に、やさしく見守りながら裏方作業に励むスタッフの人たちの姿がありました。事故やケガが無い様に、そして充実した食育ができる様に。

食育講座だけではありません。大豆トラスト、小麦トラスト、フォーラム、そしてこの「空とぶてんとう虫」も、活動し支える大勢のスタッフや会員さんがいたからこそ続けて来られたのです。

よく「ひとりひとりの力は小さくても、集まれば大きな力になる」という言葉を聞きますが、本当は「ひとりひとりの力は大きく、集まればどんな事でも成し遂げられる」ではないかと、自給ネットの10年の活動を振り返りながら私は思っています。  
(事務局長 大熊 久美子)